

新しい物質主義の展開と可能性

Trajectories and Possibilities of New Materialisms

佐藤 竜人

SATO, Ryoto

はじめに

言語論的転回以降、ここ30年ほどで情動論的、非人間論的、思弁論的などの多くの転回が論じられてきた。どの転回も近代で抱かれてきた自律的主体や表象主義に基づいた認識論、人間／自然という二元論に対して、情動や非人間的な力を称揚し、また人間とは無関係に存在する実在を擁護しようとしてきた。こうした多くの転回を包含するように別の転回がある。それは、物質論的転回である。この転回はこれらの力や実在をすべて物質として捉え直してきた。

こうした転回の起点となっているのが、新しい実在論である。新しい実在論には様々な立場として、思弁的実在論、オブジェクト指向存在論、そして本稿で取り上げたい新しい物質主義(New Materialism: 以下 NM)がある。特に、前二者は日本でもすでに頻りに紹介されており、また彼らの目的意識は近い。メイヤスー、ハーマンは近代だけではなくポストモダニズムの認識論的枠組みをそれぞれ相関主義、人間アクセスの哲学と名指し、乗り越えようとしている。すなわち彼らは、人間と関係することによってのみ存在しうる実在という枠組みを乗り越えるべく、人間の認識の外部に存在し、人間とは無関係に存在する実在としての物質の擁護を試みてきた。

ポスト／近代の枠組み批判という観点をこれらの実在論と一定程度共有しつつも、異なった視点から実在としての物質を主張しているのが NM である。以下で詳述するように、NM は近代の対応説に基づいた表象主義やポストモダニズムの言語に基づいた社会構築主義への批判意識を彼らと共有しつつも、その理論的潮流や問題意識から表象主義を異なった観点から批判し、実在としての物質を主張しようとしている。

本稿の目的は NM の思想的展開をマッピングするとともに、その理論的可能性を把握することにある。今や NM は、哲学や政治理論、社会学を始めとしてフェミニズム、メディア研究、文学批評、建築学など多くの分野へと影響を与えている。こうした動向を裏付けるかのように英語文献は非常に豊富にあるにも関わらず、日本語での研究はわずかしかない(Alaimo and Hekman 2008; Coole and Frost 2010; Dolphijn and van der Tuin 2012; Ellenzweig and Zamuito 2017; Frost 2011; Hird and Roberts 2011; Tuin 2018; Tuin and

Nocek 2019; 北野 2018; 現代思想 2015)。本稿では、思弁的实在論やオブジェクト指向存在論と比しても新しい实在論において重要である NM に関する日本での研究の欠落をカバーするとともに、NM が乗り越えるべき課題と可能性を明らかにする。

以下では次のように考察を進める。すでに述べたように英語文献は非常に豊富にありそれらに依拠しつつ、NM の基本的主張、現実的・理論的文脈を確認する。その上で、代表的な論者である K. バラドと J. ベネットの主張を検討する。そして、最後に NM の課題と可能性を明らかにする。

第一章 新しい物質主義について

第一章第一節 新しい物質主義の基本的主張

NM の基本的主張は次の三点に集約される。第一にデカルト－ニュートンの二元論の乗り越え、第二に行為体 (agency) としての物質の擁護、第三に物質－言説からなる存在－認識論 (onto-epistemology) である。

第一に、デカルト－ニュートンの二元論についてである。NM は二元論のパラダイムが哲学ではデカルト、そして科学ではニュートンによって完成されたものと捉えており、今まで持続していると見ている。その二元論とは、主体／客体、文化 (人間)／自然 (物質) という区分である。NM は二元論に付随するいくつかの主張を問題視している。それはまず表象主義である。近代の対応説に基づいた認識論は、主体が表象された客体の性質を正しく認識することができることを主張してきた。こうした表象主義はポストモダニズムの理論の中でも主要な立場である社会構築主義によって疑問視されてきたが、NM によれば彼らも表象主義の枠組みから抜け出せてはいない。構築主義も同様に自然や物質を文化や言説によって余すことなく構築、つまり表象できると考えているのである。

第二に、この二元論の問題に関連する行為体としての物質の擁護である。二元論では、一方の主体や文化、人間のみが行為体性を有し、他方の客体や自然、物質は受動的、静的なものとして考えられてきた。こうした行為体性の非対称性に対して、NM は物質も行為体であることを主張する。この時、従来考えられていたように人間のみが唯一の行為体ではなく、世界に存在する行為体のうちの一つであり、様々な物質から構成される行為体でもあると捉えられるようになる。

その上で、主張されるのが第三の物質－言説に基づいた存在－認識論である。物質も行為体であるならば二元論という枠組みは維持されえず、言説や文化、主体と物質や自然、客体は連続的に構成されるものであり、その連続性の中で实在が物質と言説によって相補的に構成される、と NM は考える。この時、存在論と認識論も連続した枠組みとして置き換えられる。世界の外側から観察する主体としての人間に基づいた認識論はもはや成立せず、絡み合った世界の中に存在する一人の行為体として認識論と存在論は存在－認識論として繋ぎ合わされる。

第一章第二節 新しい物質主義の文脈

前節では、NMの基本的主張を確認した。彼らの直接的な問題意識は近代における二元論とそれに付随する諸要素だった。ここではそれらがどのようにして現実的・理論的関心から問題となってきたかを検討する。NMにはすでに多くの概説書があるが、ここではD. コールとS. フロストによる『新しい物質主義』を特に参照し、他の著書や論文も適宜参照する。

コールやフロストだけではなく、他の論者も指摘するようにNMの知識の土壌となったのは何よりも文化論的・言語論的転回である。この転回は非常に多くの分野に影響を与えてきた一方で、特に社会構築主義と自然科学との間に軋轢をもたらした。極端に見れば、一方の構築主義は言語一元主義であり、全ての実在を言語的・社会的構築物と捉えたが、他方の少なくとも量子論以前の自然科学は観察対象が人間から全く切り離されてそれ自体で実在すると考えてきた。

しかし、言語に還元できる物質やそれ自体で存在する物質というどちらものナイーブな想定は科学技術や自然科学、環境問題が複合的に進展することによって揺るがされていく。コールとフロストはNMの台頭の起点となる物質の理解に関する転換点を三つ挙げている。それは、第一に20世紀における自然科学の進展であり、第二に特に生命や身体に関する科学技術の進展による倫理的・政治的関心の高まりであり、第三に生政治やグローバルな資本主義の分析における構築主義的枠組みの不十分さである。一点目として、古典的な自然科学では物質はニュートン的な枠組みに依拠して考えられてきた。しかし、「ポスト古典物理学は物質をより理解しがたく、複雑なものとして考える」(Coole and Frost 2010: 5)ようになった。ここで、彼女らが念頭に置いているのは量子力学や複雑系科学である。これらの立場は、物質を単なる切り離された観察対象ではなく、むしろ人間と相互作用にあるものとして把握してきた。二点目の生命や身体に関する科学技術の進展はNMにとって重要な論点の一つである。その中で特に遺伝子やサイボーグに関する科学技術は、人間に固有の特性や境界を揺るがし、ますます薄れさせている。この問いが非常に重要であるのは、自然や正義に関する近代の信念だけではなく、これらを構成してきたパラダイムへも疑問を投げかけているからである(Ibid: 6)。そして第三に、構築主義的分析枠組みの不十分性である。この点については以下で見る。

これらの問題はそれぞれ絡み合っているものの、それぞれに対応するように彼女らは三つの理論的潮流を挙げている。第一に物質それ自体が行為体性を有すると積極的に捉えていくドゥルーズ&ガタリに影響されたポストヒューマニズム、第二に人間の身体や生命と生政治との関係を考察するフェミニズムを中心とした立場、第三に資本主義をより広い地政学や社会経済との関係で把握しようとする立場である⁽¹⁾。

第一にポストヒューマニズムについてである。ここで目指されるのは先に見たNMの中心的な主張である物質や人間の存在論的な再定位である。ここでも主要な批判の矛先となる

のがデカルト－ニュートン主義である。この枠組みがこれほどまでに批判の対象とされるのは、彼らの「物質に関する理解が自然に関する概念的、実践的領域だけではなく、特に近代的態度や主観主義的な勢力のエートスを生み出してきた」(Ibid: 8)からである。それゆえ、この立場で目指されているのは、物質や人間の行為体性、そしてそれらを下支えする近代的枠組みをどのように理解するのか、という点でもある。

対して、NMの枠組みを構想するための大きな資源となるのがドゥルーズ&ガタリである。NMを立ち上げたM. デランダやR. ブライドッティ、また彼らに影響を受けたベネットはドゥルーズ&ガタリに依拠して理論を築き上げてきた。彼らがドゥルーズ&ガタリに依拠して導き出そうとしているのは、分析枠組みとして二元論の破棄だけではなく、無機的な物質のうちにも創造的な力を見出すことでもある。それゆえ、NMにとって物質性とは「常に『たんに』物質以上の何かである。それは、物質を活動的、自己－創造的、生産的、予測不可能にするような過剰さ、力、躍動性、関係性や差異」(Ibid: 9)なのである。このように物質性を再定位したとき、人間の行為体性に関する理解も再考されるようになる。なぜならば、もはや人間のみが行為体性を独占的に有しているわけではなく、また物質はただ支配されるだけの受動的な存在ではない。むしろ物質の力によって人間の行為体の有効性が制限されていることを、私たちは見出すようになるからである(Ibid: 14)。

次に第二の潮流である身体や生命と生政治との関係を問うフェミニズムを中心とした立場について見ていこう。ここで中心的に問題とされるのは自然科学や科学技術の進展によって、今まではほとんど不可侵と見なされてきた身体や生命の領域が改変可能になり、人間の固有性が揺るがされてきた点にある。そのため、ここで焦点を当てられるのはそれらの諸技術や科学の中でも特に複雑系科学や遺伝子に関わる生物学や遺伝子技術、神経科学、インターネットやGPSなどの情報技術、ロボット工学である。こうした一連の科学技術に依拠した生政治は、人生のあらゆる領域に介入しているだけではない(ローズ 2014)。そうした諸領域への浸透は、主体の自律性を不透明にし、人々の態度や判断する過程を形成するようにもなった(Connolly 2002)。

これらの出来事は必ずしも否定的な側面ばかりをもたらしているわけではなく、NMにとって積極的な側面をもたらしている。科学技術と人間の間を論じてきたハラウェイがその積極性を主張してきた一人である。フェミニズムに立脚する彼女にとって、自律的主体とは男性・西洋中心主義の象徴に他ならなかった。科学技術の進展によって自律的主体が疑問に付されることは、それらの象徴の凋落を意味する点において積極的な意味を持ちうるのである。そこで、彼女は「サイボーグ宣言」において科学技術と人間との異種混交的なサイボーグの確立を論じた(ハラウェイ 2000a)。ハラウェイのようにサイボーグを主張しなくとも、生政治や科学技術の活性化に触発されて社会構築主義を批判的に拡張しようとする立場もある。構築主義はフェミニズムにとって、自律的主体を脱構築する視点をもたらした点で多くの論者がたしかに支持してきた。しかし、極端な構築主義は言語一元主義のために身体

という物質的な側面を見落としていたことは言うまでもない。そうした流れの中でもバトラーは、見落とされていた身体という側面を拾い上げてきた。それにも関わらず、S. アライモと S. ヘックマンはバトラーの試みが、「これらの領域における議論は身体についての言説の分析に焦点を当てていた」(Alaimo and Hekman 2008: 3) 点で不十分であると指摘する。それゆえ、フェミニズムにとって求められるのは、「活動的、時には抵抗する力それ自体として身体の物質性を論じるような方法」(Ibid: 4) なのである。つまり、この第二の潮流であるフェミニズムは主に構築主義を批判し、身体についての言説ではなく、身体そのものの力、そしてその物質性を取り上げようと試みている。ここで注記する必要がある点として、「新しい物質主義による物質化の概念化は人間中心主義ではなく、人間の身体の特権化しない」(Coole and Frost 2010: 20) ことである。そのため NM に基づいたフェミニズムは、人間だけではなくより幅広い身体を包含した関係を問うのである。

最後に第三の潮流として、資本主義の位置づけを再考しようとする立場である。コールとフロストは物質を視野にいれた分析枠組みとして「批判的物質主義」と呼んで整理している。ここでも批判の矛先となるのは、構築主義である。しかし、この物質主義は構築主義を批判的に継承しようとして試みている。たしかに構築主義が主張するように「社会は物質的現実であると同時に、社会的に構築されている」(Ibid: 27) もの、全ての物質が構築性に還元されず、それ自体で力を持ち、相補的に構成されているのである。

こうした分析視角をもとに批判的物質主義は資本主義の再定位を狙う。「資本主義システムはなにか狭く経済的な視点でのみ理解されるのではなく、相互接続される現象や過程のマルチチュードとして扱われる」(Ibid: 29) 必要がある。資本主義の批判的分析、そしてマテリアリズムという点でマルクス主義を思い浮かべるかもしれないが、この批判的物質主義は「マルクス主義の再興と同義語ではない」(Ibid: 30) と注意が促されている。NM はたしかに物質を分析の基底に据えるものの、それは決して目的論的な唯物論ではなく、むしろ非目的論な物質それ自体の躍動性に焦点を当てるのである。その一方で NM は、マルクス主義の遺産である資本主義分析を引き継ぎ、国家間の資本主義システムや自然環境との関係を問うより開かれたグローバルなネットワークに組み込もうとする。

本節ではここまで NM の基本的主張と問題意識および三つの潮流を確認してきた。しかし、NM とはどのように「新しい」のだろうか。フェミニズムに焦点を当てただけでもこれまで物質と身体は中心的な議論であり (Ahmed 2008)、これまでマルクス主義だけではなく、多くの論者が物質について論じてきた。こうした疑問について、コールとフロストは幾ばくかの解答をしている。これまでの物質性に関する議論を踏まえれば「新しい」物質主義とは、むしろ「更新された (renewed)」物質主義とするほうが望ましいだろうと答えている。この「更新された」という観点のもとで、NM は現代的な状況のなかで古い物質主義の伝統を再発見しつつ、それを新しい方向へと押し出していくべきなのである (Coole and Frost 2010: 4)。次章ではここで取り上げた潮流のうち第一と第二のものなかでそれぞれ代表的

な論者を取り上げることによって、どのような新しい方向へと議論を進めているかより検討していく⁽²⁾。

第二章 ジェーン・ベネット：生氣論的物質主義

本章では、ジェーン・ベネットが提起する生氣論的物質主義 (vital materialism) を検討する。ベネットの思想的源泉はドゥルーズ、スピノザ、ベルクソン、デランダや、ソロー、エマソン、ホイットマンなどのアメリカ思想、そしてドリーシュなどの生氣論者にもある。彼女はこうした一連の思想家から物質の躍動性を見出し、理論を構築してきた。だが、ベネットの議論の特徴的な点は、生氣論における躍動性にヒントを得つつ、それを物質そのものに帰することで物質の躍動性、そして行為体性を導こうとしていることである。

ベネットの大枠での批判対象はやはりデカルト的二元論である。この二元論に基づいた哲学では「世界が鈍い物質と活発な生命 (私たち、存在) と」(Bennett 2010: vii) に分けられている、と彼女は述べる。しかし、彼女によれば二元論の哲学はこの分割に留まらない。二元論のうちで「人間は有機的、特異、そして魂を有しているだけではなく、存在論的なヒエラルキーの頂点を占有し、そのなかで地球上の全てのものへの優位な位置にある」(Ibid: 87) のである。彼女の特徴的な点はこのヒエラルキーへの批判にある。これまでの思想史上で生氣論や物質の行為体性に関する議論は存在したが、それらがヒエラルキーを伴っている限り、彼女は批判的態度を欠かさない。

この特徴は、彼女が生氣論的物質主義をなぜ提起するのか、という点によく表されている。二元論で抱かれている「死んだあるいは一貫して道具化された物質というイメージは人間の傲慢性や、侵略や消費という私たちの地球への破壊的幻想を助長させている」(Ibid: ix) と彼女は述べる。それゆえ生氣論的物質主義は、ヒエラルキーの頂点に存在する人間というイメージを批判するために提起されている。こうした批判意識のもとで論じられる「生氣論的物質主義の政治的目標は行為体の完全な平等ではなく、政体におけるメンバー間のコミュニケーションの結びつきをより豊かにすること」(Ibid: 104) にある。

生氣論的物質主義が提起された『躍動する物質』でベネットは、2003年に起きたアメリカでの大停電や食べ物、幹細胞など様々な事例を分析しているものの、ここでは彼女の直接的な思想的源泉となっているドリーシュとベルクソンに関する議論を検討していきたい。ベネットが彼ら进行评估している点は、当時の霊的な力や魂に基づいた生氣論者だけではなく、自然を機械論的に把握する当時の物質主義者にも反対し、また生氣性のみならずわずかながらも物質の躍動性も彼らが擁護していた点にある。ドリーシュのエンテレヒー、ベルクソンのエラン・ヴィタルに基づいた生氣論は、魂の生氣論のように完全に身体と精神を切り離すのではなく「持続する制約と強力な身体 - 化学的傾向のうちでのみ作動する」(Ibid: 79) のであり、またそこで想定される物質および自然は計算可能ではなく「何かが計量化、予測、操作からいつも逃れていく」(Ibid: 63) のである。すなわち、彼らは生氣性を物質とは区別

される原理として要請しつつも、それが現動化されるためには物質が必要とされ、また現動化された物質は機械論に還元されえない。また生氣性それ自体が物質の躍動性の源となる力であるだけでなく、その力が吹き込まれた物質も変化や創造性を宿しているのである。

ベネットは彼らが論じる生氣性や現動化される物質が機械論や目的論への反対を含んでいる点で自身の生氣論的物質主義に近く、共感すると述べる。その一方で、「彼らが自然の過程のなかに見出した生氣性に適した物質性を想像できなかった」(Khan 2009: 95)とも指摘する。では、こうした非目的論・非機械論的で全ての物質そのものに力が内在していると考えられている彼女の生氣論的物質主義はどのようなものなのだろうか。

彼女は自身の物質主義の理念を「物体の形象を活動的な原理として、凝結と拡散という様々な状態につねにある活発な物質性の宇宙、神性や目的性に参与したり経験したりされる必要もなく活動的、創造的な物質性を是認すること」(Bennett 2010: 94)と主張する。すなわち、彼女はドリーシュやベルクソンで考えられていた生氣性が物質から区別されずに物質そのものに内在する力として考える。ベネットは鈍いと考えられてきた物質が生氣性を持つものとして捉え直すことで、行為体性の理解に関しても再考を促そうとしている。物質の力は「条件反射や本能、刺激に対する予め定められた反応以上の行為に参与する感覚のなかにある行為体」なのである(Ibid: 80)。この行為体性について、これまで考えられてきた人間の行為体性へのベネットの批判に基づいてより検討しよう。

人間の行為体性について、ベネットは効果(efficacy)、軌跡(trajjectory)という二つの観点から批判している。行為体性はこれまで人間の道徳的能力と意図に結び付けられ、行為とは人間が意図した効果としてのみ現れると考えられてきた。しかし、生氣論的物質主義に基づくと、「効果と道徳的主体との間の結びつきをゆるめ、効果が呼びかけに応答する差異を作り出す力という考えにより近くなる」(Ibid: 32)と理解される。つまり、行為体性ははっきりとした人間の意図として理解されるのではなく、他の行為体への応答、そしてその中で新たなものが作りだされる力として理解される。次に軌跡についてである。道徳的能力や意図に関わる点として、行為は目的論的に捉えられてきた。その一方で、行為体性では先に見た生氣性のように目的なき運動として理解されるべきである(Ibid: 32)。軌跡とはこの時、目的論的な観点からではなく、創造性をつねに湛えた過程として捉えられるようになる。以上から、行為体性とは狭く人間の意図に結び付けられるものではなく、目的なき運動、進行中の他の運動への応答という行為として理解されるならば、必ずしも人間以外の生物だけではなく、物質も含めた非生物へも配分されている。

ベネットが注意を促すように、行為体性は個体主義的に解釈される可能性があるが、そのように解釈されるべきではなく、「行為体は単独で行為することは決してできない」(Ibid: 21)と考えられるべきなのである。彼女はドゥルーズ&ガタリやデランダを引用しつつ、行為体性を集合体(asssemblage)という観点から理解する必要性を主張する。彼女の解釈によれば、集合体とは構成する諸要素の内側から生じる絶え間ない運動や、それらを支配する中

心の不在にも関わらず、機能できる生きた連合体である (Ibid: 23-4)。やや難しい概念ではあるものの、人間も集合体であることを考えればわかるだろう。人間はそれ自体で完結した行為体ではなく、化学物質や臓腑、脳など様々な行為体である物質から構成されている。それゆえ、人間の行為はこれらの様々な行為体の力の集合の現れとして理解できる。人間ではミクロなスケールだが、彼女が事例として検討しているアメリカの大停電のようなマクロな事象も電子、送電線、電気技師、電力会社などの諸要素の集合体として考えることができるだろう。

以上から、生氣論的物質主義とは目的論的・機械論的な概念には還元されえない物質そのものの生氣性、ヒエラルキーなき集合体を擁護し、これまでの二元論への批判的資源としていくための枠組みと言え。驚くべき点として、ベネットの物質主義は多くの論者から NM の代表的理論として数えられているものの、彼女自身は「新しい」と呼ばれることについて誤読を招くと述べていることである。批判的物質主義は、何か新しいものではなく、身体的フェミニズム、マルクス主義のエコ哲学、メルロ＝ポンティの現象学、ニューレフトといった力強く、そして生き生きとした思想的伝統に沿って主張されたものなのである (Bennett 2018: 448)。

第三章 カレン・バラド：行為体的实在論

本章では、カレン・バラドが提起する行為体的实在論 (agential realism) を検討する。バラドは第一章で見た潮流で言えば第二のフェミニストの潮流にあたる。バラドの経歴はやや特殊であり、量子力学に関する理論物理学で博士号を取ったのちに、より学際的な場へと身を移し、特に科学に関するフェミニズムを研究するに至っている。この移行と当時の時代状況が彼女の行為体的实在論を今まで方向付けていると言っているだろう。その時代状況とは科学实在論と社会構築主義との間の激しい議論状況である。バラドは双方の批判に理解を示すと同時に、どちらもの实在の捉え方に批判的だった。そうした实在論とは異なるバラドの实在論がどのように生み出されたかを見ていこう。

科学实在論や社会構築主義が何かということは繰り返さない。バラドは彼らがデカルト的切断と呼ばれる存在論的分離を前提としており、その上に築かれた表象主義を問題にしている。デカルト的切断とはバラドによれば、知識 (表象)、知られるもの (表象されるもの)、知るものの存在 (表象する人) が認識論的にだけでなく、存在論的にも完全に切断されていることである (Barad 2008: 123)。バラドはデカルト的切断に基づいた实在や知識の捉え方に対して、これまでのフェミニズムのうち特にバトラーのパフォーマティヴィティを批判的に拡張し、また彼女自身の特徴的な専門である量子力学の知見を組み合わせることによって、物質性に根差した行為に基づく行為体的实在論へと、彼女は移行しようと試みている。

まず一つ目の要素である量子力学への着目について見ていこう。量子力学のなかでも彼女が特に重要視するのは N. ボーアである。彼女はボーアの量子力学実験に関する主張がデカ

ルト的切断への挑戦を含むものとして評価している。実験の中でも有名な二重スリット実験から明らかのように、観察者の存在は原子の实在の決定とは切り離せえず、それゆえ観察者は対象の外部には位置できない。バラドは次の点を強調する。それは「部分的に構築された切断が所与の状況に対してのみ両義性を解決し、それが全体性という部分的な事実であり、区分する。それこそが、部分的な現象である」(Barad 1996: 171)という点である。原子の波か粒子かという両義的な性質はあらかじめ決まっているのではなく、観察者、計測機器や対象の絡み合った場から、限定された状況が切り出されることによってのみ決定されるのである。全てが混ざり合う全体、そして切断された限定的で部分的な状況のことを現象とバラドは呼ぶ。

ボーアの理論は認識論的な側面に分析が限定されていたが、バラドはそれを存在論的な次元へと拡張し、行為体的实在論として確立しようと試みる。ボーアを継承するに当たって彼女が重要視するのは現象という場である。現象とは、ボーアにおいて示唆されたように『『観察者』と『観察対象』という認識論的な分離不可能性ということを示すだけでなく、むしろ現象は行為体的に内的-行為する (intra-acting) 『諸構成要素』の存在論的な分離不可能性である』(Barad 2008: 133)。現象を理解するに当たって一つの鍵概念となるのが内的-行為である。現象の内部には、相互作用のように「関係項 (relata) は諸関係 (relations) に先立って存在しない」(Ibid: 133)。すなわち、観察者が観察対象か、主体か客体かという区分は先立って存在せず、両者は不確定なままに関係して存在し続けている。そして、これらの決定の原理としてデカルト的切断に行為体的切断が対置される。先に見た原子の性質のように、様々な行為体が混ざり合う観測という過程のなかで初めて観察者と観察対象が決定されるのである。それゆえ实在とは、「現象-内-外部 (exteriority-within-phenomena) という局所的な状況」(Ibid: 133)においてのみ存在する。非常にわかりにくい表現だが、諸要素が分離不可能に混ざり合う全体的な場としての現象が存在し、その現象の中で決定される实在は、現象の内部に位置する。またその实在は同様に現象内に存在する観察者にとっての外部に位置すると言い換えられるだろう。それゆえ、バラドの实在論は科学实在論とも構築主義とも異なる。实在は完全な外部に位置せず、また言語に還元もされない。バラドにとっての实在とは限定された状況においてのみ決定される实在であり、客観性なのである⁽³⁾。

ここまでは行為体的实在論のうち「实在論」の側面について明らかにしてきたが、「行為体」の意味について検討していく。上述のように、現象では確固たる实在や行為体が存在せず、進行していく行為のなかで決定されていくのみである。それゆえ、バラドはこれまでのヒューマンストの行為体の捉え方を再考しようと次のように述べる。行為体性は人間の意図や主観性に従うのではなく、「内的-行為としての物質であり、それは誰かや何かが有しているものではなく、上演 (enactment) である」(Ibid: 144)。その上で彼女は、「行為体とは、身体的生産という物質-言説装置を再形成するうちで伴われる変化する変化の可能性であり、そこには因果構造の上演におけるそれらの実践に印づけられた境界策定や排除を含んで

いる」(Barad 2007: 178)と述べる。何かを排除あるいは包含することを通じて、局所的な状況で実在が決定されていく。行為体とはつまり、確立された実在を変化させることができる可能性だと言える⁽⁴⁾。またこうした行為体の捉え方をするならば、「行為体が人間の様相をしたものだけではなく、非人間にまでも配分されていると考えることは適切であるだけではなく、重要に思われる」(Ibid: 214)と彼女は述べる。つまり、行為体が進行中の過程から生み出されるものであり、変化させる可能性であるとするならば、行為体は人間に限られたものではない⁽⁵⁾。

以上では、バラドのボーアの解釈に着目して行為体的実在論を明らかにしてきた。以下では残されたパフォーマンスィヴィティに着目する。バトラーによれば、パフォーマンスィヴィティとは行為の前に主体をあらかじめ設定せずに、既存の文化的、身体的布置の引用とともに反復的に生起する行為によって身体が作り出されていく過程である(Butler 2011)。バトラーがパフォーマンスィヴィティを言説的行為という単純に言語的行為ではなく、物質を折り合わせた行為を主張していることによって、表象主義のパラダイムから抜け出そうと試みている点をバラドは評価している(Barad 2008: 151n26)。行為体的実在論における現象では、観察/対象、主体/客体という二元論だけではなく、物質/言説という二元論も排他的に存在しているのではなく、「物質的なものと言説的なものは内的-行為の力学のなかで相補的に関係している」(Ibid: 139)。バラドはバトラーがパフォーマンスィヴィティによる身体の形成を問題化している点に、この物質と言説との相補的な関係を見出しているのである。そうした評価の一方で、バラドはバトラーの物質性に関する議論について不十分さを見出し、パフォーマンスィヴィティの批判的拡張を試みている。「バトラーの物質性の理論が人間の身体の物質化についての説明、あるいはより正確に言うならば人間の輪郭の構築へと限定されている」(Ibid: 151n26)とバラドは批判する⁽⁶⁾。上述のように、行為体的実在論において行為体は人間に限定されず、そこには非人間も含まれている。そうだとするならば、身体の問題を人間のみに限定する必要はなく、非人間的なものの身体をも射程にいれなければならない。パフォーマンスィヴィティはこの時、バトラーが述べる反復的な引用性としてではなく、「むしろ反復的な内的-行為として」(Ibid: 146)理解されるべきなのである。すなわち、私たちは現象という「進行中の内的-行為という世界の一部」であり(Ibid: 146)、他の様々な行為体になりうるものたちと関係を結びながら、生起していく存在なのである。

おわりに——新しい物質主義の可能性

本稿ではNMの展開と主要な論者であるジェーン・ベネットとカレン・バラドを検討してきた。両者とも大きくはNMとして、二元論の再考や物質の行為体性を推し進めようとする点では一致している。しかし、そこには相違も存在する。ここでは最後に彼女らの相違とそれにまつわる課題を挙げたあとに、NMの可能性を見て終わりたい。

最大の相違は彼女らの行為体の捉え方にあるだろう。一方のベネットではどの存在も行為

体性をあらかじめ有している。他方のパラドでは行為体性はあらかじめ配分された性質ではなく、確定された実在の境界を揺るがず可能性に割り当てられるのであり、ある時点において全てのものが行為体性を有しているわけではない。NM に対する最も難問といえる批判が二点あり、それぞれの問題点として帰することができるだろう。

第一にフラットな存在論にまつわる問題である。NM ではどの存在も等しく行為体であるならば、どのようにしてとある行為体よりほかのものが重要であるとか、配慮すべきであると言うことができるのだろうか (Diener 2020: 3)、という批判が第一のものである。この批判はベネットに帰することができるだろう。彼女はたしかに生氣論的物質主義の目標が全ての行為体の間の差異の抹消や、それらの完全な平等の達成ではないと述べている。その一方で、彼女がどのように行為体の間の非対称性、特に人間の絶大な力を再定位しているか、という点はより詳しく検討される必要がある。

第二の批判はパラドに直接向けられている。それは、「行為体的実在論に関する概括されたパラドの理論でさえ皮肉なことに、啓蒙的な観客としての主体を繰り返し再記述しているように解釈されうる」(Rosiek, Snyder and Pratt 2019: 6) ことである。パラドの適用領域はたんに観察実験に限定されず、より広く科学技術と人間との関係にまつわる問題も範疇に含んでいる。しかし、パラドの立場の問題点とは理論的焦点の一つであった観察実験に絞ったとき、内的-行為という進行中の過程で近代的な観察主体をなぞり続けてしまう可能性が大いにあることだろう。

NM が乗り越えるべき課題はこれら二つをまとめて次のように言えるだろう。近代的な主体、より広げるならばポストモダニズムにおける主体をも含めた人間中心主義を避けつつ、他の多様な行為体のうちで人間の力の非対称性を含み入れた人間の再定位を目指さなければならない。この非常に困難な課題に応答することはできないものの、これまでの NM の議論を顧みていくつかの可能性をあげることができる。

そのために、まず NM の何が「新しい」かということについて応える必要がある。ベネットは自身の物質主義が「新しい」と呼ばれることを拒否し、近年の動向を踏まえたうえで他の物質主義に連なるものとして考えていた。しかし、NM の使命がコールとフロストの述べるように時代状況に対応するように更新していくことだとすればベネットの主張と相反するものではない。そうした中で、これまでの物質主義に対してではなく、時代状況のなかでの「新しさ」があるとするならば次の点だろう。それは、ポストモダニズムの相対主義的行き詰まりについてである。NM はポストモダニズムの理論を多かれ少なかれ引き継いでおり、彼らを批判的に拡張しつつ物質を視野に入れてきた。社会構築主義的手法を捨て去ることなく、物質を相補的に組み合わせる枠組みを築くことは、別の観点から実在を論じられるようになる。パラドやハラウェイが示唆するように、こうした議論はポストモダニズムでは語られえなかった客観性について論じることを可能にする。

こうした分析視角や客観性は可能性の一つではあるが、他にも存在する。S. アスベルグ

らは本稿で最初に触れた思弁的实在論やオブジェクト指向存在論と比較した時の NM の可能性として、状況-と共に-生成 (becoming-with-context)、状況に置かれた知 (situated knowledge)、思弁的な他化への世界生成 (speculative alter-worlding)⁽⁷⁾ の三点を挙げている (Åsberg, Thiele, and Tuin 2015)。状況に置かれた知とは、先に触れた NM の实在性や客観性のことを意味している。また状況-と共に-生成と思弁的な他化への世界生成は重なる部分があるもののそれぞれ可能性を秘めている。状況-と共に-生成は、存在論的に人間が他の行為体と切り離せず絡み合っているということの意味する。限定された状況において私たちは生成し、他の存在を配慮するような倫理的行為が要請される。そして、最後の思弁的な他化への世界生成は、他の实在論との最も大きな相違点となる。彼らは实在を外部に指定したことによって、あたかもここではない他の世界を希求しているかのようなのである。その一方で、NM では他の行為体と絡み合い生成しながら、今この世界の中で存在の別のあり方を思考する。

NM は物質を行為体として見直し、それと共に生成する存在として人間を見直していく。そうした新しい関係の結びは、人間のためのみの知を模索するのではなく、局所的で具体的な状況における他の行為体を含めた私たちのための知を模索し、私たちがこの世界の中で生き延びていくための足掛かりをもたらしてくれる。

注

- (1) 別の潮流の分け方 (Dolphijn and Tuin 2012) では次の二つに分けられている。彼女らに従うと、一つはドルーズ&ガタリに触発され、それぞれ独立して新しい物質主義を提起したデランダ (De Landa 1996) とブライドッティ (Braidotti 2000) であり、もう一つはハラウェイやバラドのフェミニズムを中心とした文化理論である。彼女らの分け方はコールとフロストが採用している第一、第二にそれぞれ対応するものの、第三の資本主義に関する立場が抜け落ちている。
- (2) ここでは、第三の潮流の代表的な論者を取り扱えないものの特一人あげるとすれば W. コノリーだろう。彼はいち早くからポストモダニズムの言語中心主義から距離を置き、身体と主体との関係に焦点を当てた点でも新しい物質主義者として評価されている (Alaimo and Hekman 2008:3)。また近年、彼は資本主義と自然環境との関係を「生成の世界」として勢力的に論じている (Connolly 2013)。
- (3) こうした限定的な实在や客観性はバラドがたびたび参照しているハラウェイの「状況に置かれた知」(ハラウェイ 2000b) と重なる部分が非常に大きい。
- (4) バラドの行為体という概念に曖昧さがある点には注意を払う必要があり、T. インゴルドは次のように指摘している。バラドの「行為体が内的-作用であるならば、行為体概念がなぜ必要なのか私にはまったくわからない」、と彼は述べている (Ingold 2015: 153n9)。バラドが内的-行為によって言わんとすることが、行為体があらかじめ指定されないということならば、その内的-行為そのものが行為体であるということは奇妙に思われる。
- (5) 現象内部においてのみ確立される实在という議論はカントの認識論の枠組みにあると思われるかもしれない。しかし、両者の枠組みを分かっ点が二つある。第一に行為体的实在論において「物自体はなく、現象のみ存在」し、「カントの現象でも現象学における現象でもない」(Barad 2008: 150n23)。第二に人間の立ち位置である。人間は外部に位置する観察者ではなく、世界である現象

の一部である。

- (6) バラドはバトラーへの批判と同様の批判を多くのフェミニズムの知的源泉となってきたフーコーへも向けている。彼女によれば、「言説」と「非言説」を分けていたものの、後者が「社会的制度実践へと還元されている」(Barad 2008: 151n25)と述べる。
- (7) worlding という語の訳出にあたって逆巻しとね訳によるフランクリン (2019) を参考とした。

参考文献

- 北野圭介(編集)(2018)『マテリアル・セオリーズ：新たなる唯物論にむけて』人文書院
- サラ・フランクリン (2019)「子どもではなく類縁関係をつくろう」『HAGAZINE』逆巻しとね訳
(https://hagamag.com/uncategory/4293_2020/12 アクセス)
- ダナ・ハラウェイ (2000a)「サイボーグ宣言」『猿と女とサイボーグ』高橋さきの訳、青土社
- (2000b)「状況に置かれた知：フェミニズムにおける科学という問題と、部分的視覚が有する特権」『猿と女とサイボーグ』高橋さきの訳、青土社
- ニコラス・ローズ (2014)『生そのものの政治学』椋垣立哉、小倉拓也、佐古仁志、山崎吾郎訳、法政大学出版局
- 「現代思想 2015年6月号 特集=新しい唯物論」『現代思想』青土社
- Ahmed, Sara (2008) “Imaginary Prohibitions: Some Preliminary Remarks on the Founding Gestures of ‘New Materialism’,” *European Journal of Women’s Studies*, 15(1), 23-39.
- Alaimo, Stacy and Hekman, Susan (2008) *Material Feminism*, Indiana University Press.
- Åsberg, Cecilia, Thiele, Kathrine and Tuin, Iris van der (2015) “Speculative Before the Turn: Reintroducing Feminist Material Performativity,” *Cultural Studies Review*, 21(2), 145-72.
- Barad, Karen (1996) “Meeting the Universe Halfway: Realism and Social Constructivism without Contradiction,” in Nelson, L.H. and Nelson, J. (eds.) *Feminism, Science and the Philosophy of Science*, Kluwer Academic Publishers, 161-194.
- (2007) *Meeting the Universe Halfway*, Duke University Press.
- (2008) “Posthumanist Performativity: Towards an understanding of How Matter Comes to Matter,” in Alaimo and Hekman(eds.) *Material Feminism*, Indiana University Press, 120-154.
- Bennett, Jane (2010) *Vibrant Matter*, Durham: Duke University Press.
- (2018) “Vibrant Matter,” in Braidotti, Rosi (ed.) *Posthuman Glossary*, Bloomsbury Academic, 447-448.
- Braidotti, Rosi (2000) “Teratologies,” in Deleuze and Feminist Theory, Buchanan, Ian and Colebrook, Claire (eds.) *Edinburgh University Press*.
- Butler, Judith (2011) *Bodies That Matter*, London: Routledge.
- Connolly, William E. (2002) *Neuropolitics*, University of Minnesota Press.
- (2013) “The ‘New Materialism’ and the Fragility of Things,” *Millenium*, 41(3), 399-412.
- Coole, Diana and Frost, Samantha (2010) *New Materialisms: Ontology, Agency and Politics*, Duke University Press.
- De Landa, Manuel, (1996) “The Geology of Morals: A Neo-Materialist Interpretation.”
([http://www.t0.or.at/delanda/geology.htm\(2020/8](http://www.t0.or.at/delanda/geology.htm(2020/8) アクセス)

- Diener, Samuel (2020) "New Materialism," *The Year's Work in Critical and Cultural Theory*, mbaa003.
- Dolphijn, Rick and Tuin, Iris van der (2012) *New Materialism: Interviews & Cartographies*, Open Humanities Press.
- Ellenzweig, Sarah and Zamuito, John H. (2017) *The Politics of New Materialism*, Routledge.
- Frost, Samantha (2011) "The Implications of New Materialisms for Feminist Epistemology," in Groswick, Heidi E. (ed.) *Feminist Epistemology and Philosophy of Science*, Springer, 69-83.
- Hird, Myra J. and Roberts, Celia (2011) "Feminism theorises the nonhuman," *Feminist Theory*, 12(2), 107-117.
- Ingold, Tim (2015) *The Life of Lines*, Routledge.
- Kahn, Gulshan (2009) "Agency, nature and emergent properties: An interview with Jane Bennett," *Contemporary Political Theory*, 8, 90-105.
- Rosiek, Jerry Lee, Snyder, Jimmy and Pratt, Scott L. (2019) "The New Materialisms and Indigeneous Theories of Non-Human Agency: Making the Case for Respectful Anti-Colonialism Engagement," *Qualitative Inquiry*, 1-16.
- Tuin, Iris van der (2018) "New/Neo Materialism," in Braidotti, Rosi (ed.) *Posthuman Glossary*, Bloomsbury Academic, 277-279.
- Tuin, Iris van der and Nocek, A.J. (2019) "New Concepts for Materialism: Introduction," *Philosophy Today*, 63(4), 815-822.

[さとう りょうと／東京大学大学院総合文化研究科/政治理論]